も丶くさにやそくさそへてたまひてしちぶさのむくいけふぞわがする

〔曾禰好忠集〕夏四月

めも白妙に、色わかず、雪よりけなる、おもとじの、ちぶさのむくい、するほどに、くる夏ごとに、あひくれど、〇略下

〔松屋筆記八〕おもとじの乳ぶさのむくい

同集〇曾丹集長歌に、目も白妙に、色わかず、雪よりけなる、おもとじのちぶさの、むくい、するほどに云々、按に、おもとじは母刀自なり、和名抄に、辨色立成云、嬭母和名知於毛、今按、卽乳母也と見ゆ、異本には、知もじなくて、たゞ和名於毛とあり、されど寶生院本にも、知於毛とあれば、異本の方は字落たるなるべし、母の一名を於毛ともいへるにや、乳ぶさは、遊仙窟に奶房をよめり、後撰に手ぶさにけがる云々、曾丹集に、手ぶさをひぢて云々、などあるふさも同義也、

〔技癢錄一〕男子乳汁

凡人身體所具、無一不有官能而存者、獨至男子之乳、從來未聞有言其用者、人或曰、男子之乳、吮之累日、皆亦生湩、後漢有元紫芝李善二人乳流湩以哺遺孤、由是觀之、爭亂之世、鰥居之人、承乏以存哺養、故亦不爲無其用也、